

2022年10月2日聖霊降臨後第17主日説教

ハバクク書 第1章 1-6節、12-13節、2章 1-4節

テモテ書二 第1章 6-14節

ルカによる福音書 第17章 5-10節

10月に入りました。昨日は聖アンデレ主教座聖堂で、執事按手式が行われ、東京教区に新しい執事が誕生いたしました。その礼拝での「寄り添うこと」の大切さを話された説教は、心を新たにされる思いでした。礼拝後の「執事の舞」には驚きました。

先週水曜日は、教役者研修会があり、8月に行われたランベス会議の報告がありました。いくつか報告書をいただいていますので、皆さまにお読みいただけるように設置する予定です。今回のランベス会議は、新しい歩みを始めるといっても、今を慎重に歩むようにと呼びかけているようです。

先々週行われた『北関東教区との宣教協働・教区再編（新教区設立）に関する説明懇談会』の報告書は、近日中にホールに数部設置いたします。新しい教区設立の歩みを皆さまとも共有したいと思います。

社会では、「国葬儀」が終了しました。日本聖公会は「国葬」として正式に反対を表明していました。「国葬儀」に参列する自由、それを「国葬」として反対する自由、そのような自由な発言と行動が保たれている現在、それがこれからも維持されればよいと思います。

さて、今日の旧約日課は、「ハバクク書」です。「ハバクク書」は一二小預言書のひとつです。本書で語られている内容が歴史どおりであるならば、ユダ王国が新バビロニア帝国に滅ぼされる直前の預言となります（紀元前6世紀ごろ）。主なる神様の王国が分裂したのち、北にあったイスラエル王国が滅亡してから約200年後のことです。そして、残った南のユダ王国が、国家および民族的危機に直面した混乱の状況、預言者ハバククは、そのような状況に対して預言を語ったこととなります。

1節に「**預言者ハバククが、幻で示された託宣**」とありますが、「新共同訳」では少し意識されています。新しい「聖書協会共同訳」では、「**預言者ハバククが見た託宣**」となっています。ハバククは、示されたのではなく、見たのです。何を見たのか、それは「託宣」と訳されています。「託宣」とは日常では用いない言葉ですが、神的な何かが告げた言葉です。ここでは主なる神様が与える預言と同じ意味で用いるのですが（イザヤ15:1、17:1、19:1）、元来はあらゆる発話行為を意味します。また第一の意味は「重荷」でもありますので、「エレミヤ書」23:33では「託宣」が「重荷」になると掛詞となっています。

ここで大切なことは、ハバククがその言葉である託宣を「見た」と表現されていることです。「託宣（発話）を見る」、それが実際どのような現象であった明確ではありません。現代、様々なメディアでニュース等を見ているわたしたちの方が、『聖書』の時代の人よりも、想像しやすいといえるかもしれ

ません。いずれにしても、預言者ハバククは、自分が語るべき内容を、言葉だけではなく、具体的に見て理解したのでした。

1章節から「主よ、わたしが助けを求めて叫んでいるのに、いつまで、あなたは聞いてくださらないのか。わたしが、あなたに『不法』と訴えているのに、あなたは助けてくださらない」と始まります。「わたし」は、ハバクク本人と考えてよいと思いますが、今苦しんでいる人の代表ととらえてもよいと思います。その人は、現在行われている主なる神様の王国内での不法行為を、主なる神様に訴えても、応えて下さらないと訴えかけています。

1章4節では、「律法は無力となり、正義はいつまでも示されない。神に逆らう者が正しい人を取り囲む。たとえ、正義が示されても曲げられてしまう。」と訴えています。ハバククの時代に、「律法」がどれほど重要視されていたかという疑問はあります。しかし、主なる神様がイスラエルの歩みを正しい方向へと導く「律法」が、力を失っているという訴えは、社会が人間の考えや思いが中心となっていることを示しています。

これらのハバククの訴えに対する主なる神様の答えは、決して慰めのような優しい言葉ではありませんでした。1章6節に「見よ、わたしはカルデア人を起こす。それは冷酷で剽悍な国民。地上の広い領域に軍を進め自分のものでない領土を占領する」とあります。「カルデア人」とは、セム族の一つですが、新バビロニア帝国を起こす人々です。彼らは、北イスラエル王国を滅ぼしたアッシリア帝国を滅ぼします。この新バビロニア帝国が南ユダ王国を滅ぼすのです（紀元前586年）。主なる神様は、正義を訴える正しい人の訴には、王国自体の滅亡で応えんとするのです。

しかし、その滅亡をもたらすカルデア人（新バビロニア帝国）について、聖書日課では省略されていますが、「彼らは風のように来て、過ぎ去る。しかし、彼らは罪に定められる。自分の力を神としたからだ」（ハバ1:11）とされています。実際、新バビロニア帝国は、ペルシアによって滅ぼされ、帝国の歩みは、200年もありませんでした。

ハバククは、これらの現象を託宣として見たのですが、「主よ、あなたは永遠の昔から、わが神、わが聖なる方ではありませんか。我々は死ぬことはありません。主よ、あなたは我々を裁くために、彼らを備えられた。岩なる神よ、あなたは我々を懲らしめるため、彼らを立てられた」（ハバ1:12）と語り、主なる神様への信頼を失いません。そして、新バビロニア帝国による王国の滅亡が、主なる神様によるイスラエルへの懲らしめであることを認識しています。

しかし、同時に「あなたの目は悪を見るにはあまりに清い。人の労苦に目を留めながら、捨てて置かれることはない。それなのになぜ、欺く者に目を留めながら、黙っておられるのですか、神に逆らう者が、自分より正しい者を呑み込んでいるのに」（ハバ1:13）と訴えかけます。主なる神様が示す事柄を、理性的には理解できても、人間的思いでは、なかなか納得できないの

です。ここで「**神に逆らう者**」と「**正しい者**」という比較になっていますが、この「**神に逆らう者**」は、「**悪しき者**」が本来の意味です。口語訳でも聖書協会共同訳でも「**悪しき者**」と訳されています。『聖書（旧約）』において、主なる神様に逆らうことが「**悪**」であるので、新共同訳ではこのような訳になっています。

『聖書』において、善悪の判断に関して、主なる神様の視点が大切です。しかし、人間はその視点をしっかりと認識することができません。それゆえに、一般的な善悪を前提とした、人間的思いから、イスラエルの中の「**悪しき者**」が懲らしめられ、「**正しい人**」たちが報われる、そのほうがすっきりとどうしても考えてしまいます。託宣（映像）としてもそのほうが具体的にわかりやすいと思います。実際、ハバククが「**悪**」だと思った現象は、一般の目から見ても、「**悪**」であったのでしょうか。また、彼が望んだ事柄は、イスラエルに善が行われることを望んでいる人たちと同じであったかもしれません。しかし、その判断が尊い善であり、主なる神様の思いとほぼ一致したとしても、人間の思いにほかなりません。その人間の思いが具体化した「**善**」は普遍的「**善**」ではないのです。『聖書（旧約）』が徹底している事柄は、その点です。「**悪**」を平然と行うことも、「**善**」装って「**悪**」を行うことも、「**悪**」を「**善**」だと言い換えることも、許されないのですが、自らを主なる神様の立場の「**善**」だと主張することも許されないのです。

それゆえに、2章1節でハバククは、「**わたしは歩哨の部署につき砦の上に立って見張り神がわたしに何を語りわたしの訴えに何と答えられるかを見よう**」と語り、自分の見た主なる神様の答えを告げます。それは「**幻を書き記せ**」（ハバ2：2）とある通り「**幻**」でした。「**幻**」とは、日本語の意味と同じで、日中あるいは夢の中で見る映像です。主なる神様は、ハバククに見た「**幻**」をはっきりと読むことができるようにすることを明示します。今度は映像が文字化され理論としてしっかりと理解されることが求められています。その目的は、終わりの時のためのもう一つの「**幻**」があるからです。その「**幻**」がどのようなものであるか明記されていません。しかし、もっとも大切な事柄は、「**見よ、高慢な者を。彼の心は正しくありえない。しかし、神に従う人は信仰によって生きる。**」（ハバ2：4）とある通り、謙虚さを持って主なる神様を信頼することです。

ハバククが本日の最後に述べている「**しかし、神に従う人は信仰によって生きる**」、この部分は、新共同訳では少し意識されています。口語訳では「**しかし義人はその信仰によって生きる**」、聖書協会共同訳では、「**しかし、正しい人はその信仰によって生きる**」となっています。もっとも大切な事柄は、主なる神への「**信仰**」に他ならないのです。そして、この「**信仰**」について大切な事柄はたくさんあります。「**知識**」「**感情**」「**行動力**」など様々な事柄が重要です。しかし、本日のハバクク書が示しているもっとも大切な事柄とは、主なる神様に対する謙虚さにほかなりません。

本日の福音書では、使徒たちがイエス様に「わたしたちの信仰を増してください」（ルカ 17：5）と願うところから始まる物語です。これら二つの聖書日課にテーマがあるとすれば、それは「信仰」にほかなりません。

この「信仰」という言葉ですが、プロテスタント教会では、「行為義認」ではなく「信仰義認」という大切な教義の一部となっています。しかし、『聖書』が課題としている信仰は、実際に行為を伴った動作です。主なる神様を信じることは、主なる神様に忠誠を尽くし、そのために行動することです。主なる神様は行動のない心のあり方だけの信仰も求めていないのです。極端は言い方をすれば、『聖書』にある「信仰」という言葉を、すべて「忠誠」と訳しても間違いではありません。それはイエス様の場合も同じです。ただし、イエス様の場合、人間がその忠誠を徹底できないことを前提として、理解したうえでそれを求めています。そして、すべての人が従うことにたとえ失敗したとしても、それでも許されるようにご自分を十字架の死をもって犠牲として、主なる神様の許しの愛を示します。そこからもう一度、信仰・忠誠がなんであるかを呼び掛けているのです。

さて、イエス様に「信仰を増してください」と願った使徒たちは、何を願ったのでしょうか？心のあり方を増やしてくださいと考えるとおかしい質問になってしまいます、自分たちの行動をさらに深める拡大するような忠誠心を増してくださいという願いだと考えると決しておかしいものではありません。そしてそのような質問であるからこそ、イエス様は二つの答えをしているのです。一つは「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。」（ルカ 17：6）と、小さな「からし種一粒」ほどの信仰があれば、人間には想像もできないような力があることです。尋ねた使徒たちは、そのようなすごい信仰があればと思ったかもしれませんが、もしそうだとしたら、彼らが注目したのは、「力」の方でしょう。

しかし、イエス様は、もう一つの答えをしています。そこで求めている事柄は、徹底した「謙虚さ」です。自分のできること、すべきこと行ったとしても示さなければならない「謙虚さ」です。それが強調されています。しかし、それが（主なる神様への）「信仰（忠誠）」においてもっとも大切な事柄であるとイエス様も語っているのです。非常に厳しい答えですが、主なる神様に対する信仰のあり方を的確に言い表しています。

わたしたちも共に礼拝する中で、自分たちの信仰を養い、そこに無限の可能性と力があることを忘れないようにしたいと思います。また同時に礼拝において謙虚さを学びたいと思います。信仰に謙虚さがあるからこそ、わたしたちはどんな人であっても共に同じ人間であり、神の前で平等であることを確認できるのです。そして、そのようなわたしたちの礼拝と交わりから、この世界とは異なる、主なる神様の求める平和へとつながる歩みが生まれると思います。